

<第三種郵便物認可>

中国の激動の振幅の大きさ

この八月末日で六年間の学長職を離れる私は、夏休みの十日間を利用して、私の本来のフィールドである中国を香港―昆明―重慶―三峡ダム―武漢というルートで回り、いまようやく上海に出てきて、外灘に面する和平飯店に泊まっている。このホテルは、私にとっては、大層思い出深い場所でもある。

それはいまから三十五年前、私が大学の助手に採用されて初めて中国を訪れた一九六六年秋のことだが、中国では文化大革命が高揚していて、このホテルの部屋から脇の南京東路を見下ろすと、路上にまで実権派打倒のスローガンが書かれ、辺りは紅衛兵が一杯で、ホテルの正面に出ている壁新聞と武闘の写真をカメラに収めたところ、紅衛兵糾察隊に追い回され、ようやく難を逃れたのであった。

この三十五年間の中国の激動の振幅は実に大きかったが、夜目にもまばゆい南京路のネオンサインやライトアップされて不夜城のような黄浦

江沿いの旧上海バンドの賑わいは、とくにこの二年前後の上海の変貌を物語っている。今回の旅行は、二年前に華南から東北そして北京へ回った調査旅行と同様に、すべて個人でアレンジして歩き、

雲南省では少数民族自治州シ―サンパンナ(西双版纳)の景洪からさらにビルマ国境に近い橄欖壩にまで足を延ばし、懸案の三峡ダムでは工事現場も見学したが、中国の巨大さと、この巨体の行く末が抱える問題の大きさを改めて再認識せざるを得なかった。また同時に私にとっては、当面の大きな課題である台湾問題を中国大陸に身を置いて考える絶好の機会でもあった。

二年前の夏は、李登輝総統が中国と台湾を「特殊な国と国との関係」と規定したいいわゆる「二国論」が大きな問題となり、法輪功の李洪志批判とともに李登輝批判が中国全

土のメディアに現れていた。このときには、各地を回って北京に至り、やはり日本人が殆ど泊まらない前門飯店に身を置いて、この巨大な中国を強権的に統治している江沢民主席には、台湾人のアイデン

台湾の発展に尽力することになった。「政局安定、経済振興、民主強化、台湾発展」という連盟の基本目標は大変結構であるが、台湾の将来は台湾人民による民主的な投票で決めるという対大陸政策につ

られるように、米国に対抗する世界覇権国家としての体制確立を着々と進めつつある。二〇〇八年の北京五輪で国威を大々的に発揚した直後の二〇〇九年には「現代の万里の長城」ともいえる三峡ダムや

上海―重慶間の高速度路を完成し、いよいよ「二十一世紀は中国の世紀」を挑戦的に実現しようとしている。

このような現実のまえでは、余程の信念と決意が固まっていなければ、台湾はやがて大陸に呑み込まれてしまうであろうし、中国社会が抱える実に様々な病理や共産党独裁国家の実態を知ることな

く、上海一帯に見られる表面的繁栄が目くらんで、そのような将来でよいとする経済人の意見も強まるであろう。だとすれば、李登輝時代の十二年間の台湾が民主化と台湾人意識の確立をもたらしたがゆえに、この延長線上にあるのは「台湾共和国」という選択しかないのではなからうか。李前総統もしばしば語っているように「台湾中華民国はすでに独立している」のだから、あとは民意(民主的な投票)に基づく国名変更で済むはずである。

そのような民意の形成こそ、「台湾團結連盟」に期待されるところであろう。それが公開で堂々となされるなら、米国はじめ全世界も台湾民衆の民意を尊重するはずであり、それに対して中国当局が武力で抑圧することは、少なくとも二〇〇八年の北京五輪を前にしては極めて難しい。二〇〇八年までの時間は、中国にとってのみならず、台湾にとっても実に大切な時間であることを、今回の旅行で私は痛感した。

(なかじま みねお)

「台湾共和国」は禁句なのか

正論



東京外国語大学長 中嶋 嶺雄

中国の地で台湾問題を考えてみた

上海一帯に見られる表面的繁栄が目くらんで、そのような将来でよいとする経済人の意見も強まるであろう。だとすれば、李登輝時代の十二年間の台湾が民主化と台湾人意識の確立をもたらしたがゆえに、この延長線上にあるのは「台湾共和国」という選択しかないのではなからうか。李前総統もしばしば語っているように「台湾中華民国はすでに独立している」のだから、あとは民意(民主的な投票)に基づく国名変更で済むはずである。